

加東市

山国・大丹波遺跡

— (主) 神戸加東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和 7 (2025) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

加東市

山国・大丹波遺跡

－（主）神戸加東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



令和7（2025）年3月

兵庫県教育委員会

例　言

- 1 本書は、加東市に所在する山国・大丹波遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(主)神戸加東線道路改良事業に伴うもので、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、令和2年度から令和4年度に兵庫県立考古博物館が発掘調査を実施し、令和5年度および6年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が出土品整理事業を実施した。
- 3 調査の推移
(発掘作業)
確認調査　令和2年11月16日、令和3年5月18日、令和4年9月9日
実施機関：兵庫県立考古博物館
本発掘調査　令和3年1月12日～1月20日、令和4年9月12日～9月22日
実施機関：兵庫県立考古博物館
(出土品整理事業)
令和5年4月1日～令和6年3月31日
令和6年4月1日～令和7年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課寺西梨紗の補助のもと、同課　鐵英記が担当した。
- 5 本調査に置いて出土した遺物や作製した写真図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館)で保管している。
- 6 調査および測量に当たっては、本体工事受注業者の協力を受け、実施した。
- 7 遺物の写真撮影は、株式会社地域文化財研究所に委託し、実施した。
- 8 座標系は世界測地系に基づき、調査地は第V系に属する。
- 9 本書で用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

凡　例

- 1 本書に使用した地図は下記のとおりである。
周辺の遺跡：『兵庫県遺跡地図』(2020)「65：西脇」・「75：社」を加工
確認調査位置・本発掘調査位置：加東土木事務所　事業平面図を加工
- 2 遺物種別の表示は、実測図断面の色を土師器・瓦は白抜き、須恵器は黒ベタとしている。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 整理作業の経過	
第3章 調査の成果	7
第1節 遺構	
第2節 遺物	
第4章 総括	13
報告書抄録	14

挿図・表目次

第1図 周辺の遺跡	3
第1表 周辺の遺跡一覧	4
第2表 掲載遺物一覧表（1）	11
第3表 掲載遺物一覧表（2）	12

図版目次

図版1 確認調査位置	
図版2 本発掘調査位置	
図版3 1区全体図	
図版4 1区標準断面図・遺構断面図	
図版5 2区全体図	
図版6 2区標準断面図・遺構断面図	
図版7 遺物1	
図版8 遺物2	
図版9 遺物3	
図版10 遺物4	

写真図版目次

- 写真図版 1 1区 調査区全景（南から）／1区 調査区北半（南から）
写真図版 2 1区 遺構断面
写真図版 3 2区 調査区全景（北から）／2区 遺構断面
写真図版 4 2区 遺構断面／調査風景
写真図版 5 出土遺物
写真図版 6 出土遺物
写真図版 7 出土遺物
写真図版 8 出土遺物
写真図版 9 出土遺物
写真図版 10 出土遺物
写真図版 11 出土遺物
写真図版 12 出土遺物

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

山国・大丹波遺跡が所在する加東市は、兵庫県の中央南寄りにあり、東は丹波篠山市、西は加西市、南は小野市、北は西脇市と接する。その総面積は157.49km²をはかり、加古川中流域に位置する自治体である。平成18年に旧加東郡の滝野町・社町・東条町が合併して成立した。本書で報告する山国・大丹波遺跡は加東市域でも、旧社町域に位置する。旧国では「播磨国」の賀茂郡（賀毛郡）に属し、播磨と丹波を結ぶ交通の要衝であった。

加東市は、北部から北東部にかけて、中国山地の支脈が延び、これらに連なる山塊が存在している。市の西部には播磨地方東部を貫流する加古川があり、その中流域にもあたる。加古川に沿って段丘が発達し、市域は低位段丘から中位段丘にあたるが、低位段丘の多くは加古川およびその支流の沖積作用により、埋没している。加古川には東条川、出水川、千鳥川、吉馬川、油谷川などの支流が流れ込み、当遺跡のある山国周辺は東条川と千鳥川にはさまれた地域にあたり、中位段丘となる。遺跡周辺は西側に低位段丘と中位段丘を分かつ段丘崖があり、南北にこの段丘（現在の山国集落）を開析する小河川が流れている。

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡を時代ごとに概観してみる。

旧石器時代については、明確な資料が少ないが、曾我・鍋子谷遺跡、喜田・中ノ池遺跡でナイフ形石器が採集されている。縄文時代も前代に引き続き内容のわかつている遺跡が少ないが、旧滝野町域にある河高・溝ノ越遺跡、河高・平田遺跡で縄文時代後期・晚期の遺物が出土している。当遺跡周辺では山国・王子ヶ池遺跡（51）で縄文時代の遺物が採集されている。

弥生時代になると前期から複数の集落が営まれるようになる。前期後半に出現する遺跡として、社・大塚遺跡（33）、田中・蓼原遺跡（36）があり、後者では中期初めまでの遺構が見つかっている。加古川西岸では同時期の遺跡として河高・平田遺跡、河高・上ノ池遺跡があり、加古川東岸では窪田・前田遺跡（22）、西垂水・觀音寺遺跡（23）、家原・堂ノ元遺跡（26）が見つかっている。中期中葉から中期後葉になると、前段階から営まれている窪田・前田遺跡（22）、社・大塚遺跡（33）に加えて、穂積・高町遺跡（20）、田中・両部遺跡（34）、松尾・山西遺跡（39）、山国・源ヶ坂遺跡（42）などが出現する。これらのうち、家原・堂ノ元遺跡（26）は後期後葉から後期末の時期に集落が拡大する。

加東市では古墳時代前期の前方後円墳は発見されておらず、前期の状況は不明である。中期に入ると直径40mを測る大型円墳である松尾古墳（40）が当遺跡西方に認められる。その他にも中位段丘およびその周縁で山国・源ヶ坂古墳（41）、南坊古墳群（53）などいくつかの古墳が認められる。集落遺跡としては、前期から営まれるものとして、河高・溝ノ越遺跡、西垂水・東下り遺跡などがあり、中期のものとしては中期末から後期にかけて営まれる家原・堂ノ元遺跡（26）、西垂水・觀音寺遺跡（23）などがあげられる。当遺跡においても古墳時代後期の遺物が散見される。また、中位段丘上に築かれた古墳に混じって、生産遺跡である立合池窯跡（57）が存在する。

古代における当遺跡周辺は、『和名抄』で穂積郷と呼ばれた地域にあたる。白鳳時代から奈良時代の中

心的集落遺跡には家原・堂ノ元遺跡（26）がある。また、喜田・清水遺跡（13）からは二彩火舎や重圈文瓦が出土し、8世紀後半から11世紀まで存続する寺院跡と考えられる。奈良時代後半から平安時代にかけては、当遺跡でも過去の調査で掘立柱建物が見つかっているほか、今回の調査で溝・土坑等も検出されている。また、直近には奈良時代の山国・小山遺跡（45）、平安時代の旧妙仙寺跡（47）があり、山国・源ヶ坂遺跡（42）では、古墳時代のものも含むが、平安時代までの掘立柱建物群が見つかっている。また、式内社である佐保神社も遺跡西方に鎮座する。なお、生産遺跡としては、市北部の窯跡群に加え、当遺跡近傍でも、奈良時代の窯跡として山国・王子ヶ池窯跡（52）が知られている。

中世になると加東郡域には複数の荘園が営まれることとなる。鎌倉時代の初め、当遺跡周辺は国衙領福田保になり、室町時代には山城石清水八幡宮領になっていたようである。そのような環境の中で、家原・堂ノ元遺跡（26）、山国・源ヶ坂遺跡（42）などが中世の集落として営まれていた。特に山国・源ヶ坂遺跡（42）では鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物群30棟余りが調査されている。当遺跡においても鎌倉時代の遺構が若干検出されている。

近世になると、旧社町域は当初全域が姫路藩領であったが、その後、複数の領主の知行地となつた。そして、旗本浅野氏の家原陣屋跡（25）の他、三草藩陣屋、陸奥白川藩陣屋（のちに陸奥棚倉藩陣屋）が置かれた。当遺跡周辺は山国村に含まれ、おおむね幕府領と推移したが、幕末の史料（慶応4年丹羽氏知行目録）では大部分が三草藩領になっている。

【参考文献】

- 加東郡教育委員会『家原・堂ノ元遺跡』（1984）
- 加東郡教育委員会『山国・源ヶ坂遺跡』（1990）
- 加東郡教育委員会『藤田・一ノ谷口遺跡』（2002）
- 兵庫県教育委員会『田中・蓼原遺跡』（2011）
- 兵庫県教育委員会『貝原ナマズ遺跡・南塩田遺跡』（2011）
- 兵庫県教育委員会『河高・溝ノ越遺跡』（2011）
- 今井林太郎編『日本歴史地名体系 兵庫県II』（1999）平凡社



第1図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	山国・大丹波遺跡	古墳時代～中世	38	出水・神田遺跡	弥生時代
2	上三草・郷野遺跡	中世	39	松尾・山西遺跡	弥生時代～中世
3	下三草・三草野遺跡	古墳時代～奈良時代	40	松尾古墳	古墳時代
4	下三草・諏訪ノ下遺跡	弥生時代～中世	41	山国・源ヶ坂古墳	古墳時代
5	下三草・川ノ上遺跡	弥生時代～古墳時代	42	山国・源ヶ坂遺跡	弥生時代～中世
6	藤田・門ノ坪遺跡	中世	43	山国・花折中世墓群	中世～近世
7	藤田・薮下遺跡	中世	44	山国・花折遺跡	奈良時代
8	藤田・宮ノ下遺跡	中世	45	山国・小山遺跡	奈良時代～中世
9	藤田・カイチ遺跡	中世	46	山国・南中谷遺跡	奈良時代、中世
10	木梨古墳群	古墳時代	47	旧妙仙寺跡	平安時代
11	喜田・中山古墳	古墳時代	48	山国・口ノ森池散布地	縄文時代
12	木梨・北浦遺跡	弥生時代～中世	49	山国・奥ノ森池散布地	縄文時代
13	喜田・清水遺跡	奈良時代～中世	50	東実・保神坂遺跡	中世
14	喜田・町田遺跡	古墳時代～奈良時代	51	山国・王子ヶ池遺跡	縄文時代
15	梶原・番丁田遺跡	平安時代～中世	52	山国・王子ヶ池窯跡	奈良時代
16	梶原・大道遺跡	古墳時代～中世	53	南坊古墳群	古墳時代
17	梶原・西畠遺跡	弥生時代～古墳時代、中世	54	東実・大辻遺跡	中世
18	下鴨川・大力メ遺跡	中世	55	阿弥陀堂北遺跡	古墳時代
19	上中・溝ノ内遺跡	奈良時代～中世	56	山国・南山古墳群	古墳時代
20	穂積・高町遺跡	弥生時代、奈良時代～中世	57	立合池窯跡	古墳時代
21	穂積・廿ヶ坪遺跡	平安時代	58	東古瀬・坊ノ下遺跡	中世
22	窪田・前田遺跡	弥生時代～中世	59	東古瀬・坊ノ上遺跡	中世
23	西垂水・觀音寺遺跡	弥生時代～平安時代	60	屋度古墳群	古墳時代
24	西垂水・番茶遺跡	中世	61	屋度・北山古墳群	古墳時代
25	家原陣屋跡	近世	62	東古瀬・岩シロ遺跡	中世
26	家原・堂ノ元遺跡	弥生時代～中世	63	屋度・小芝遺跡	中世
27	家原・南田遺跡	弥生時代～中世	64	船木1号墳	古墳時代
28	木梨・西ノ原遺跡	弥生時代～中世	65	妙見塚古墳	古墳時代
29	藤田・一ノ谷口遺跡	奈良時代～中世	66	船木3号墳	古墳時代
30	藤田・南山古墳群	古墳時代	67	船木東遺跡	平安時代～中世
31	木梨・南山古墳群	古墳時代	68	菅田古墳	古墳時代
32	社・澤遺跡	中世	69	船木遺跡	弥生時代、中世
33	社・大塚遺跡	弥生時代～中世	70	船木東光寺遺跡	弥生時代～中世
34	田中・両部遺跡	弥生時代、中世	71	久保木遺跡	弥生時代、中世
35	社・梨乃木遺跡	中世	72	久保木慶雲寺遺跡	中世
36	田中・蓼原遺跡	弥生時代、平安時代～中世	73	住吉南遺跡	平安時代
37	出水・芝ノ北遺跡	平安時代～中世	74	船木高町遺跡	弥生時代～中世

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

兵庫県北播磨県民局加東土木事務所は神戸加東線の改良事業を計画した。事業区間には周知の埋蔵文化財包蔵地である山国・大丹波遺跡（遺跡番号：230463）、旧妙仙寺跡（遺跡番号：230053）を含んでいた。山国・大丹波遺跡については、令和2年から順次確認調査とその結果に基づく本発掘調査を実施した。調査の概要については、次節に記述する。なお、旧妙仙寺跡に含まれる部分については、分布調査の結果、既設の水路等により、遺構面が削平されていると判断された。

第2節 発掘調査の経過

確認調査、本発掘調査とも兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課が対応した。確認調査の内容は以下のとおりである。

確認調査（図版1）

令和2年度

調査番号 2020084
調査期間 令和2年11月16日
調査面積 8 m²
調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 鐵 英記
20-1G・20-2Gを設定し、調査を行った。双方で遺物包含層・遺構を確認した。

令和3年度

調査番号 2021049
調査期間 令和3年5月18日
調査面積 12 m²
調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 鐵 英記
21-1G・21-2G・21-3Gを設定し、調査を行った。全てで遺物包含層・遺構を確認した。

令和4年度

調査番号 2022077
調査期間 令和4年9月9日
調査面積 12 m²
調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 鐵 英記
22-1G・22-2G・22-3Gを設定し、調査したが、遺物包含層・遺構は検出できなかった。

本発掘調査（図版2）

確認調査の結果に基づき、令和2年度と令和4年度に本発掘調査を実施した。

令和2年度

遺跡調査番号 2020091

調査期間 令和3年1月12日～1月20日

調査面積 336 m²

調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 鐵 英記

本報告で1区とした部分の本発掘調査を実施した。主として律令期に属する遺構・遺物を検出した。

令和4年度

遺跡調査番号 2022053

調査期間 令和4年9月12日～9月22日

調査面積 360 m²

調査担当者 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 鐵 英記

本報告で2区とした部分の本発掘調査を実施した。主として古墳時代から律令期に属する遺構・遺物を検出した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は兵庫県北播磨県民局加東土木事務所の依頼により、兵庫県立考古博物館において、令和5年度・令和6年度の2カ年で実施した。

令和5年度

魚住分館で遺物の洗浄・ネーミングを行った後、本館で遺物の接合・補強および実測を行った。

実施機関 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

担当者 調査第1課 鐵 英記

整理保存課 野田優人

栗山美奈 花房伸予 藤尾裕子 大本昌子 藤田久範

小野潤子 小林礼子 菅生真理子 石原香苗 岡崎眞子

梶原奈津子 亀井彩菜 西本奈生 濱田ゆき

柏原美音 古谷章子 寺西梨紗 佐々木誓子 松田聰子

令和6年度

遺物の復元、写真撮影、遺構図補正、図版・写真図版のレイアウト、トレースおよび報告書の執筆を実施し、報告書を刊行した。

実施機関 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

担当者 整理保存課 鐵 英記 稲本悠一

柏原美音 寺西梨紗 佐々木誓子 松田聰子

小野潤子 小林礼子 菅生真理子 石原香苗 梶原奈津子 濱田ゆき

第3章 調査の成果

令和2年度の本発掘調査対象範囲を1区、令和4年度の本発掘調査対象範囲を2区と呼称し、遺構・遺物の状況について記述する。いずれの調査区も、遺物が出土したものや明確に遺構と考えられるものを中心に記述し、遺構分類記号は付けていない。

第1節 遺構

1区 (図版3・4:写真図版1・2)

標準的な層序は、1層：耕土の直下に遺物を含む2層：灰黄褐色粘質シルトが堆積し、その下に遺構面を形成する3層：明黄褐色から黄橙色粘質シルト・粘土層が存在している。各遺構の埋土は基本的に2層である。

遺構の密度は薄く溝状の遺構と土坑状のものが多く、遺物が出土したものを記述する。柱穴状のものも認められたが、規則性を見いだせず、遺物も出土していない。

遺構1は調査区南西端で検出した溝状の遺構である。検出長9.5m、幅1.1mを測り、断面形は皿状で検出面からの深さは0.05mである。須恵器(7)が出土している。

遺構10は調査区中央付近で検出した土坑状の遺構である。平面形は橢円形を呈し、長径0.6m、短径0.35m、検出面からの深さ0.18mを測る。

遺構18は調査区北東部で検出した溝状の遺構である。ほぼ東西方向に伸びる。検出長9.7m、幅1.1mを測り、断面形は北側が深く、南が浅い。検出面からの深さは0.13mである。須恵器(8)が出土している。

遺構19は調査区北東部で検出した土坑状の遺構である。平面形は橢円形を呈し、長径0.9m、短径0.46m、検出面からの深さ0.14mを測る。

遺構22は調査区北東部で検出した土坑状の遺構である。平面形は橢円形を呈し、長径1.1m、短径0.54m、検出面からの深さ0.06mを測る。土師器(9)が出土している。

遺構24は調査区北東部で検出した。一部が調査区外に伸びているため、形状は不明だが、壁際長軸で4.44m、調査区内短軸で2.1m、検出面からの深さ0.1mを測る浅い土坑状の遺構である。須恵器(10・11)が出土している。

遺構26は調査区北東端で検出した浅い土坑状の遺構である。一部が調査区外に伸びているため、形状は不明である。東西2.8m、南北1.02m、検出面からの深さ0.06mを測る。調査区内で検出した肩部が遺構18と同じくほぼ東西方向を示しており、土坑ではなく溝の可能性もある。

2区 (図版5・6:写真図版3・4)

標準的な層序は、1層：耕土、2層：床土の下に3層：灰黄褐色細砂～シルト、4層：灰黄褐色細砂～粘質シルトが堆積し、5層：黄褐色シルト～粘質シルトが遺構検出面である。3層と4層は掘削時に認識できていなかったが、出土遺物から考えると時期差を持った堆積である可能性が高い。遺構の埋土についても、3層のものと4層のものがあると考えられる。

1区に比べると遺構の数が多いが、その大半を占める柱穴状のものについては、遺物が出土したもの

が少なく、掘立柱建物として抽出できたものもない。

遺構1は調査区南西隅で検出した土坑状の遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺1.16m、短辺0.78m、検出面からの深さ0.09mを測る。

遺構38は調査区北東部で検出した柱穴状の遺構である。遺構44と位置的には重複する。直径が約0.28m、検出面からの深さは0.15mを測る。須恵器（21・22）が出土している。

遺構39は調査区北東部で検出した土坑状の遺構である。平面形は楕円形に近く、長辺1.25m、短辺1m、検出面からの深さ0.07mを測る。土師器（23）が出土している。

遺構40は調査区北東部で検出した柱穴状の遺構である。直径0.28m、検出面からの深さ0.3mを測る。須恵器（24）が出土している。

遺構41は調査区南西部で検出した土坑状の遺構である。平面形は歪んだ円形を呈し、遺構42に接している。長辺1.68m、短辺1.48m、検出面からの深さ0.15mを測る。

遺構42は調査区南西部で検出した土坑状の遺構である。平面形は隅丸方形を呈し、遺構41に接している。長辺2.32m、短辺1.84m、検出面からの深さ0.07mを測る。土師器（25）が出土している。

遺構43は調査区中央付近で検出された土坑状の遺構で、一部が調査区外に伸びる。検出長1m、幅1.1m、検出面からの深さ0.1mを測る。

遺構44は調査区ほぼ中央部で検出した溝状の遺構である。検出長は14m、最大幅は1.3m、検出面からの深さは0.04mである。遺構46とは若干間隔があるものの、方向を同じくすることと出土遺物に時期差がないことから、本来は同一遺構であった可能性がある。須恵器（26～37）が出土している。

遺構45は調査区北東部で検出した土坑状の遺構である。平面形は長楕円形を呈し、長辺1.4m、短辺0.6m、検出面からの深さ0.07mを測る。須恵器（38）が出土している。

遺構46は調査区北東部で検出された溝状の遺構である。遺構47を切る。検出長12.4m、幅1.9m、検出面からの深さは0.22mを測る。本来は遺構44と同じ遺構であった可能性もある。須恵器（39～45）と平瓦（46）が出土している。

遺構47は調査区北東部で検出された土坑状の遺構である。遺構46に切られているが、本来の平面形は壁溝状の窪みがわずかに認められ、方形であった可能性がある。遺物に関しては、遺構46と時期差はない。須恵器（47～56）と平瓦（57）が出土している。

第2節 遺物

1区（図版7：写真図版5・11）

1区からの出土遺物は1～11である。うち1～6が包含層から出土したものである。

包含層出土の遺物

図示できたものは1～5が須恵器、6が瓦である。1は須恵器の壺の体部から底部にかけての破片である。外に踏ん張る高台が付く。

2～4は須恵器の杯身である。2は短く立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く收める。底部の約2/3に回転ヘラケズリを施す。3はごく短く立ち上がる口縁部を持ち、底部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。4は短く直線的に立ち上がる口縁部を持ち、底部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。古墳時代後期、6世紀代のものと考えられる。

5は須恵器の鉢である。直線的に伸びる体部と帶状に肥厚する口縁部を持つ。口縁部外面は黒色を呈

し、重ね焼きの痕跡と思われる。13世紀頃のものと考えられる。

6は平瓦である。内面に布目痕跡があり、外面は平行タタキを施す。

遺構出土の遺物

7は須恵器の鉢である。直線的に伸びる体部と帶状に肥厚する口縁部を持つ。口縁部は内傾する。遺構1から出土した。13世紀頃のものと思われる。

8は須恵器の椀である。丸みを帯びて内彎気味に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は外反する。遺構18から出土した。

9は土師器の甕である。体部下半以下を欠くが、長胴形を呈したものと思われる。頸部のくびれは浅く、口縁部は中央が肥厚し、端部は丸く收める、調整は剥離が著しいため不鮮明だが体部外面に縦方向のハケ目が残る。遺構22から出土した。

10は須恵器の杯Aである。平底から内彎ののち、外反して口縁に至る体部を持ち、口縁端部は丸く收める。底部外面はヘラケズリを施す。11は須恵器の蓋である。天井部とつまみの一部が残る。つまみは輪状を呈する。10・11は遺構24から出土した。

2区（図版7～10：写真図版5～12）

2区からの出土遺物は12～57である。うち12～20が包含層から出土したものである。

包含層出土の遺物

図示できたものはすべて須恵器である。12は器台である。内彎気味に伸びる口縁部を持ち、口縁端部は上方に面を持ち、中央が浅くくぼむ。内面の口縁端部直下にも口縁成形時のくぼみがある。外面には全面にカキ目を施し、2条の凹線を引く。口縁と凹線の間に2段の波状文を施している。

13～15は杯Aである。13は底部から直線的に開く体部を持つ。14は若干内彎気味に立ち上がる体部を持つ。底部はヘラ切りである。外面底部付近に墨書「中」？が施されている。15は底部のみの破片で、外面はヘラ切り、判読できないが墨書が施されている。16は平高台から内彎気味に立ち上がる体部を持つ椀で、底部外面は回転糸切りである。17は杯B身の底部片である。底部と体部の境界に高台が付く。底部はヘラ切りである。18は皿Aである。内彎気味に開く体部を持つ。底部にはケズリの後ナデを施す。19は皿Bである。底部はヘラ切り、底部と体部の境界より内側に高台が付く。20は蓋である。扁平で直径の大きな宝珠つまみが付く。包含層出土の遺物は古墳時代後期の器台である12と12世紀代まで下ると思われる16を除き、概ね8世紀代に収まると考えられる。

遺構出土の遺物

21・22は遺構38から出土した。21は須恵器の椀である。底部を欠くが、平底から直線的に開く体部を持ち、口縁端部は外側に面を持つ。22は須恵器の壺である。中央がやや突出する平底に外に踏ん張る高台が付く。

23は遺構39から出土した。土師器の竈の一部と考えられ、焚口の部分と考える。鍔に接続する縦方向の突帶がある。

24は遺構40から出土した。須恵器の椀底部の破片である。わずかに突出した平高台を持ち、底部の切り離しは回転糸切りである。

25は遺構42から出土した。土師器の捏ね鉢である。平底から内彎して立ち上がる体部を持ち、口縁部は外側に肥厚して玉縁状となっている。内面に横方向のハケ目が明瞭に残る。須恵器の鉢を模倣した

ものと考えられる。

26～37は遺構44から出土した。すべて須恵器である。26・27・28は杯B身である。26は底部片で底部外面は回転ヘラ切りで、体部と底部の境界から少し内側に高台が付く。27は平底の底部から直線的に立ち上がる体部を持つ。28は平底の底部から直線的に立ち上がる短い体部を持つ。29・30・31は皿Aである。29はヘラ切りの底部から大きく開く短い体部を持つ。内面の口縁端部直下に凹線を巡らせる。30はヘラ切りの底部から大きく開く短い体部を持つ。底部外面はナデで仕上げる。31はヘラ切りの底部から大きく開く短い体部を持つ。底部と体部の境界部はヘラケズリを施す。内面の口縁端部直下に凹線を巡らせる。32・33・34は皿Bである。32は底部片で外面はヘラ切り、体部と底部の境界より、少し内側に高台がつく。33は外面ヘラ切りの底部から短く立ち上がる口縁部を持つ。高台は体部と底部の境界より内側に付く。34は外面ヘラ切りの底部から短く立ち上がる口縁部を持つ。幅の狭い高台が体部と底部の境界より内側に付く。35・36・37は須恵器の蓋である。35は頂部を欠くため、つまみは残っていないが、接合痕から輪状のものと考えられる。天井部から斜めに広がる口縁部を持ち、端部を折り曲げて直立させる。36・37はいずれも輪状のつまみを持ち、ほぼ水平な天井部から伸びる口縁部は屈曲して開き、再び水平になったのち端部を折り曲げて直立させる。

38は遺構45から出土した。須恵器の蓋である。ほぼ水平な天井部に平たい宝珠状のつまみが付く。口縁部は短く直線的に開き、屈曲したのち端部を折り曲げて直立させる。

39～46は遺構46から出土した。46を除き、須恵器である。39は皿Aである。回転ヘラ切りの底部から直線的に立ち上がる体部を持つ。口縁端部の一部に別個体の融着痕がある。40は杯B身である。回転ヘラ切りの底部から体部は直立気味に立ち上がる。高台は体部と底部の境界付近に付き、高台内面にヘラ記号が認められる。41は皿B身である。回転ヘラ切りの底部から直線的に立ち上がる体部を持つ。高台は底部と体部の境界付近に付く。42は高杯である。平たい杯部底と脚柱部だけが残る。43は鉢である。いわゆる「鉄鉢形」で広がって伸びる体部と内側に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は内側に面を持つ。44・45は壺である。44は体部のみが残存し、中位が大きく張る。45は底部および体部下半が残存し、底部と体部の境界に外側に開き気味の高台が付く。46は平瓦である。内面には布目が明瞭に残り、外面には縦方向の縄目が連続して残る。

47～57は遺構47から出土した。57を除き、須恵器である。47・48は杯B身である。いずれも底部と体部の一部が残存し、底部外面はヘラ切り、高台は体部との境界より内側に付く。49・50は蓋である。49は頂部付近を欠き、低い天井部から口縁端部が大きく屈曲して外側に面を持つ。50はほぼ水平な天井部に平たい宝珠状のつまみが付く。口縁部は短く直線的に開き、屈曲したのち端部を折り曲げて直立させる。51は皿Aである。中央が少し膨らむ平底の底部から短い体部が外に開く。底部外面はヘラケズリである。52は皿Bである。平底の底部から短い体部が外に開く。高台は底部と体部の境界より内側に付く。底部外面はヘラ切りである。53・54は高杯である。53は皿状を呈する杯部片で、水平な底部から短い口縁部が外反して伸びる。54は脚部片で、斜めに開く脚柱部から、屈曲して短く横に伸びる脚裾部は端部を折り曲げて外側に面を持つ。55は壺である。体部から底部が残存し、平底から直線的に立ち上がる体部を持つ。56は甕である。頸部から口縁部は外反して大きく開く。口縁端部は肥厚して上に面を持ち、口縁部直下に突帶を貼り付け、突帶の下に波状文、沈線、波状文、沈線を施す。体部外面は縦方向のタタキ目が残り、その上にカキ目を施す。内面には同心円状のあて具痕が残る。57は平瓦である。46と同様に内面には布目が明瞭に残り、外面には縦方向の縄目が連続して残る。

第2表 掲載遺物一覧表（1）

報告番号	種別	器種	法量 (cm)						出土地区	出土遺構	図版番号	写真図版番号
			口径	器高	底径	長さ	幅	厚み				
1	須恵器	壺	—	(4.5)	(11.2)				1区	包含層	7	11
2	須恵器	杯身	11.75	(3.5)	(7.0)				1区	包含層	7	5
3	須恵器	杯身	11.5	4.05	10.2				1区	包含層	7	5
4	須恵器	杯身	(12.8)	(3.4)	—				1区	包含層	7	—
5	須恵器	鉢	(27.2)	(4.85)	—				1区	包含層	7	—
6	瓦	平瓦			(6.9)	(10.9)	2.1		1区	包含層	7	5
7	須恵器	鉢	(26.0)	(5.8)	—				1区	1	7	5
8	須恵器	椀	(13.6)	(5.0)	—				1区	18	7	5
9	土師器	甕	(27.4)	(12.35)	—				1区	22	7	5
10	須恵器	杯A	(12.8)	3.7	(8.0)				1区	24	7	5
11	須恵器	蓋	—	(1.2)	—				1区	24	7	11
12	須恵器	器台	(42.7)	(9.2)	—				2区	包含層	7	5
13	須恵器	杯A	(13.8)	3.25	(10.0)				2区	包含層	8	5
14	須恵器	杯A	(12.8)	3.0	(10.0)				2区	包含層	8	6
15	須恵器	杯A	—	(1.5)	(10.2)				2区	包含層	8	6
16	須恵器	椀	(15.4)	4.25	(5.2)				2区	包含層	8	6
17	須恵器	杯B	—	(2.05)	9.4				2区	包含層	8	11
18	須恵器	皿A	(19.4)	1.75	(14.6)				2区	包含層	8	5
19	須恵器	皿B	—	(2.75)	(23.2)				2区	包含層	8	11
20	須恵器	蓋	—	(1.7)	—	つまみ径 2.6			2区	包含層	8	11
21	須恵器	椀	(18.2)	5.55	(7.2)				2区	38	8	6
22	須恵器	壺	—	(5.5)	(12.5)				2区	38	8	6
23	土師器	甕	—	(20.9)	—				2区	39	8	6
24	須恵器	椀	—	(3.1)	(6.1)				2区	40	8	6
25	土師器	鉢	(24.0)	(10.1)	(9.5)				2区	42	8	6
26	須恵器	杯B	—	(1.4)	(7.4)				2区	44	8	11
27	須恵器	杯B	(10.9)	4.2	(8.1)				2区	44	8	7・11
28	須恵器	杯B	(13.6)	3.2	(10.1)				2区	44	8	7・11
29	須恵器	皿A	(14.4)	1.98	(12.2)				2区	44	8	7・11
30	須恵器	皿A	(18.4)	2.8	(15.2)				2区	44	8	7・11
31	須恵器	皿A	(24.8)	2.25	(23.2)				2区	44	8	7・12
32	須恵器	皿B	—	(2.25)	(16.0)				2区	44	8	11
33	須恵器	皿B	(21.4)	3.5	(16.6)				2区	44	8	7・12
34	須恵器	皿B	(25.2)	4.0	—				2区	44	9	12
35	須恵器	蓋	(17.6)	(2.9)	(18.8)				2区	44	9	12
36	須恵器	蓋	(21.7)	3.2	—	つまみ径 8.3			2区	44	9	7・12

第3表 掲載遺物一覧表（2）

報告番号	種別	器種	法量 (cm)						出土地区	出土遺構	図版番号	写真図版番号
			口径	器高	底径	長さ	幅	厚み				
37	須恵器	蓋	(19.0)	3.05	-	つまみ径 5.35			2区	44	9	7・12
38	須恵器	蓋	(15.5)	1.5	-	つまみ径 2.55			2区	45	9	12
39	須恵器	皿A	(15.16)	3.0	(13.1)				2区	46	9	8
40	須恵器	杯B	-	(3.48)	(9.6)				2区	46	9	8
41	須恵器	皿B	(29.0)	5.7	(22.5)				2区	46	9	8
42	須恵器	高杯	-	(9.3)	-				2区	46	9	8
43	須恵器	鉢	(20.0)	(9.2)	-				2区	46	9	8
44	須恵器	壺	-	(8.5)	-				2区	46	9	8
45	須恵器	壺	-	(4.6)	7.15				2区	46	9	8
46	瓦	平瓦				(16.1)	(13.8)	2.05	2区	46	9	9
47	須恵器	杯B	-	(1.75)	(7.8)				2区	47	10	11
48	須恵器	杯B	-	(2.8)	(8.0)				2区	47	10	8
49	須恵器	蓋	(19.25)	(1.7)	-				2区	47	10	11
50	須恵器	蓋	(17.2)	2.65	-	つまみ径 2.6			2区	47	10	9
51	須恵器	皿A	(20.55)	3.1	(18.2)				2区	47	10	9
52	須恵器	皿B	(26.1)	4.3	(19.3)				2区	47	10	9
53	須恵器	高杯	(24.8)	(2.45)	杯部 (21.9)				2区	47	10	9
54	須恵器	高杯	-	(5.45)	(13.2)				2区	47	10	9
55	須恵器	壺	-	(12.5)	(14.0)				2区	47	10	10
56	須恵器	甕	(39.9)	(25.7)	-				2区	47	10	10
57	瓦	平瓦				(12.65)	(9.6)	2.3	2区	47	10	10

第4章 総括

今回の調査で出土した遺物には、大別して古墳時代後期、奈良時代、鎌倉時代のものがある。しかし、調査区全体にわたり、水田の造成等により段丘の高い部分が大きく削平を受けていると考えられ、遺構の残存状況はあまり良好とはいえない。

三つの時期のうち、古墳時代については、明確な遺構を検出することができなかった。ただし、図化した杯身や器台以外にも、杯身の破片などが見つかっており、近くに集落遺跡あるいは古墳群があつた可能性がある。

奈良時代の遺構としては溝状遺構、土坑状遺構があげられる。柱穴状の遺構も検出されたが、時期が不明のものが多く、建物として抽出できなかった。1区で検出した遺構18はほぼ東西方向に流れるものだが、他のものは方位があまり揃っていない。ただ、2区の遺構44・46は北東から南西へ直線的に流れしており、正方位に沿つたものとそれとはやや異なつたものの2種類の地割が存在している可能性がある。遺物の中で注意を引くのが、点数は少ないものの布目を持つ平瓦の存在である。さらに須恵器にも金属器写しのものやいわゆる鉄鉢形の鉢43があることから、現在は平安時代とされている旧妙仙寺（第1図：47）の創建時期が遡る可能性がある。また、29・31の皿Aは口縁端部内面に凹線がめぐるもので、近隣では西脇市大伏窯跡群の採集資料に類例が認められる（小川2010）。また、この特徴を持つ須恵器は丹波国を中心に分布する（稻本2023）との指摘もあり、当遺跡の出土のものが旧郡内から供給されたものなのか、丹波方面から供給されたものなのかについては、さらなる検討が必要である。

鎌倉時代では土坑状の遺構が散在しているが、その性格は明らかではない。遺物では、須恵器鉢模倣の土師器鉢25が注目される。外形はⅢ類（佐藤2022）の東播系須恵器鉢に近似しているが、内面に丁寧なハケ目を施しており、焼成不良の須恵器ではなく土師器と認識している。東播系須恵器鉢も出土していることから、須恵器鉢の代替品とも考え難く、遺物の性格や製作地については今後の検討が必要である。

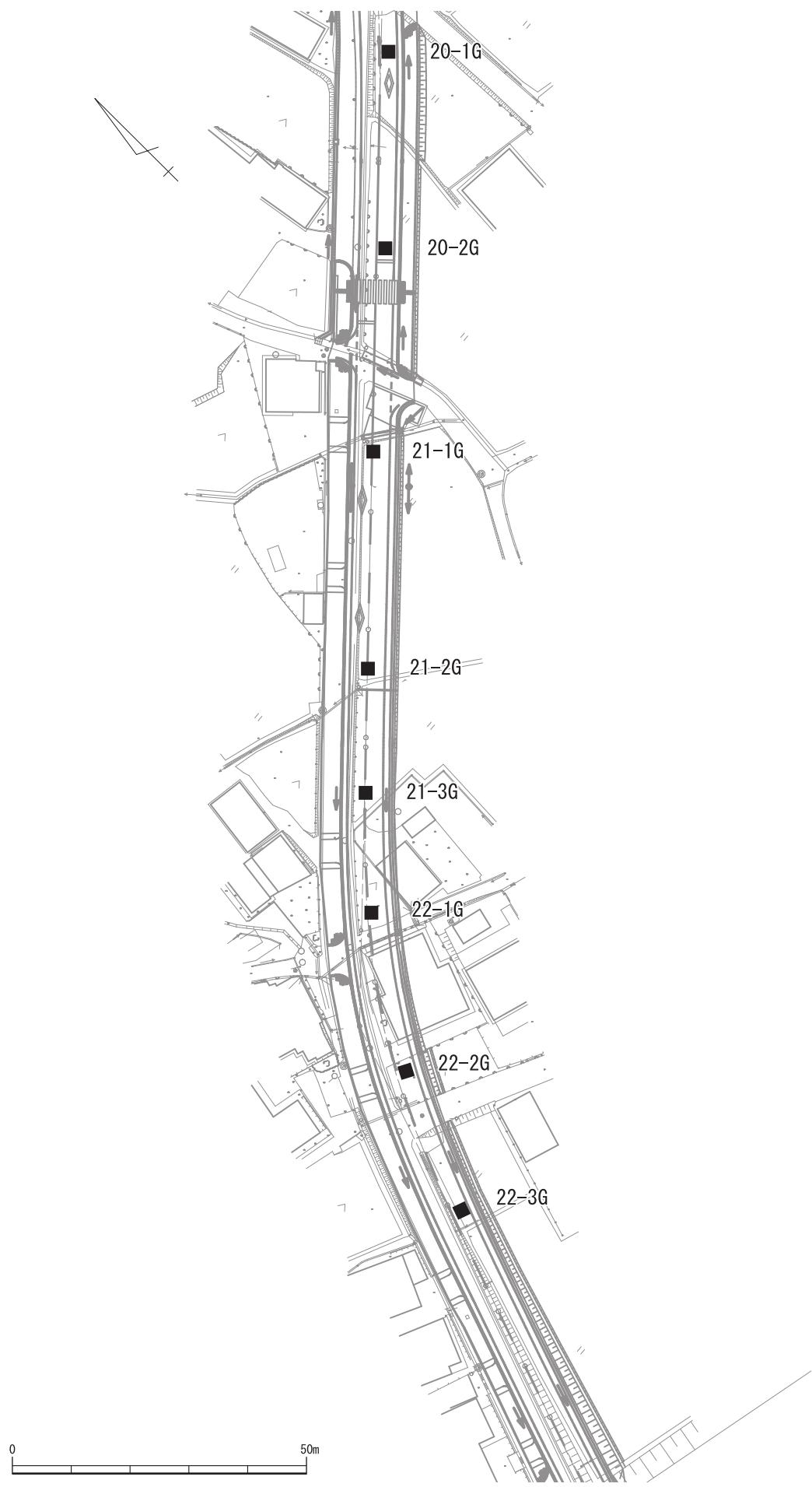
【参考文献】

- 神崎恵子『大伏古窯分布調査報告書』妙見山麓遺跡調査会（1999）
小川真理子「古代多可郡の須恵器生産」『童子山 西脇市郷土資料館紀要』第17号（2010）
佐藤亜聖「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』（2022）中世土器研究会編
稻本悠一「奈良時代の地方における須恵器生産の展開—丹波国と周辺の諸窯を事例として」『洛北史学』第25号（2023）洛北史学会

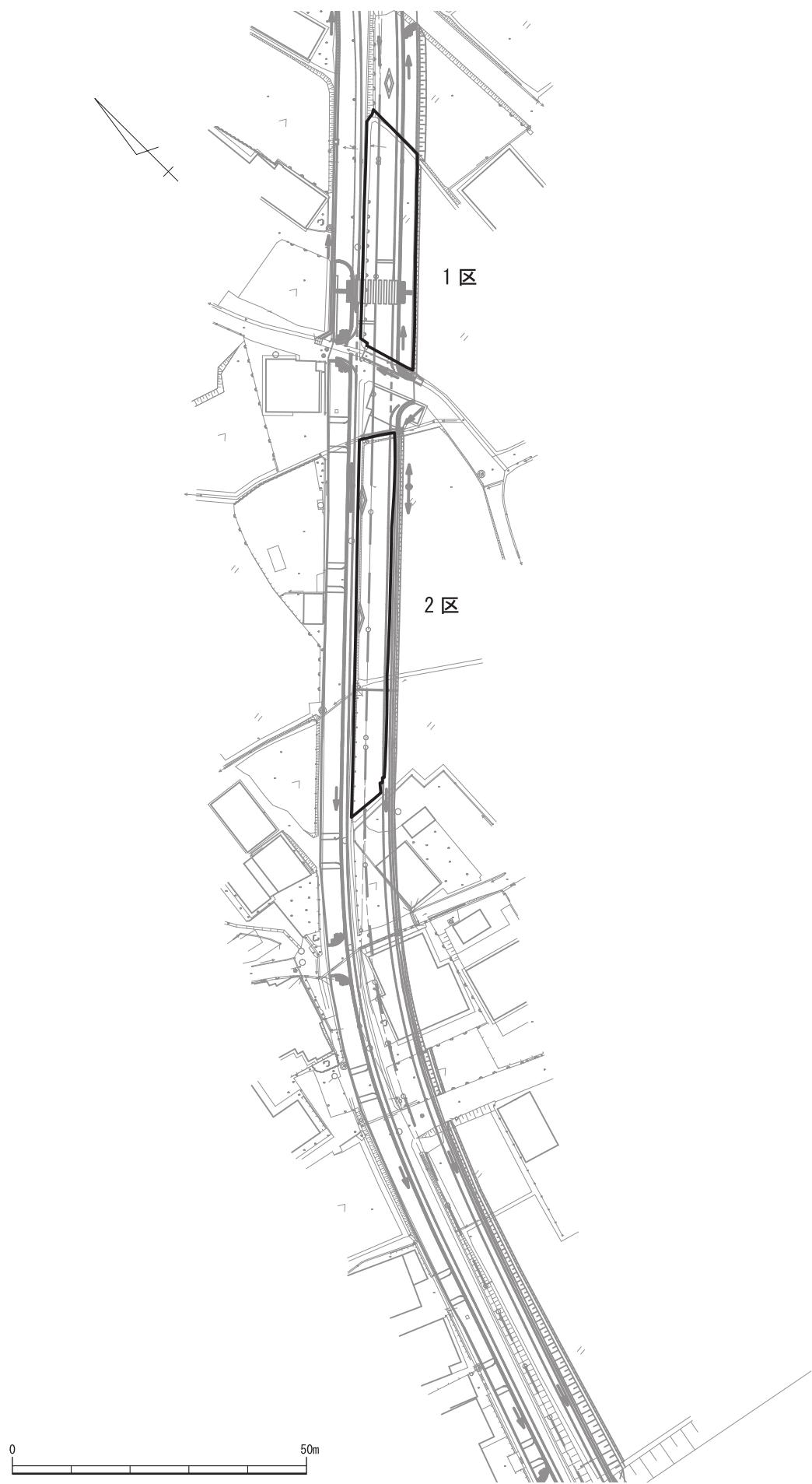
報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまくにおおたんぱいせき							
書 名	山国・大丹波遺跡							
副 書 名	(主) 神戸加東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第540冊							
編著者名	鐵 英記							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所 在 地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内) Tel079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所 在 地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel078-362-3784							
発行年月日	令和7(2025)年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所 在 地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m ²)	
市町村		遺跡番号					発掘原因	
やまくにおおたんぱいせき 山国・大丹波遺跡	加東市山国	282286	230463	34° 54' 23"	134° 58' 15"	20210112 ～20210120 (2020091) 20220912 ～20220922 (2022053)	336m ² 360m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山国・大丹波遺跡	集落跡	古墳時代		須恵器(杯身・器台)				
		奈良時代	溝・土坑	須恵器・平瓦	寺院跡か			
		鎌倉時代	土坑	須恵器・土師器				
要約	古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。古墳時代については遺物のみの出土である。奈良時代については2種類の地割に沿っていると考えられる溝が検出された。平瓦や金属器模倣の須恵器が出土しており、寺院跡の可能性もある。鎌倉時代については土坑が検出されている。							

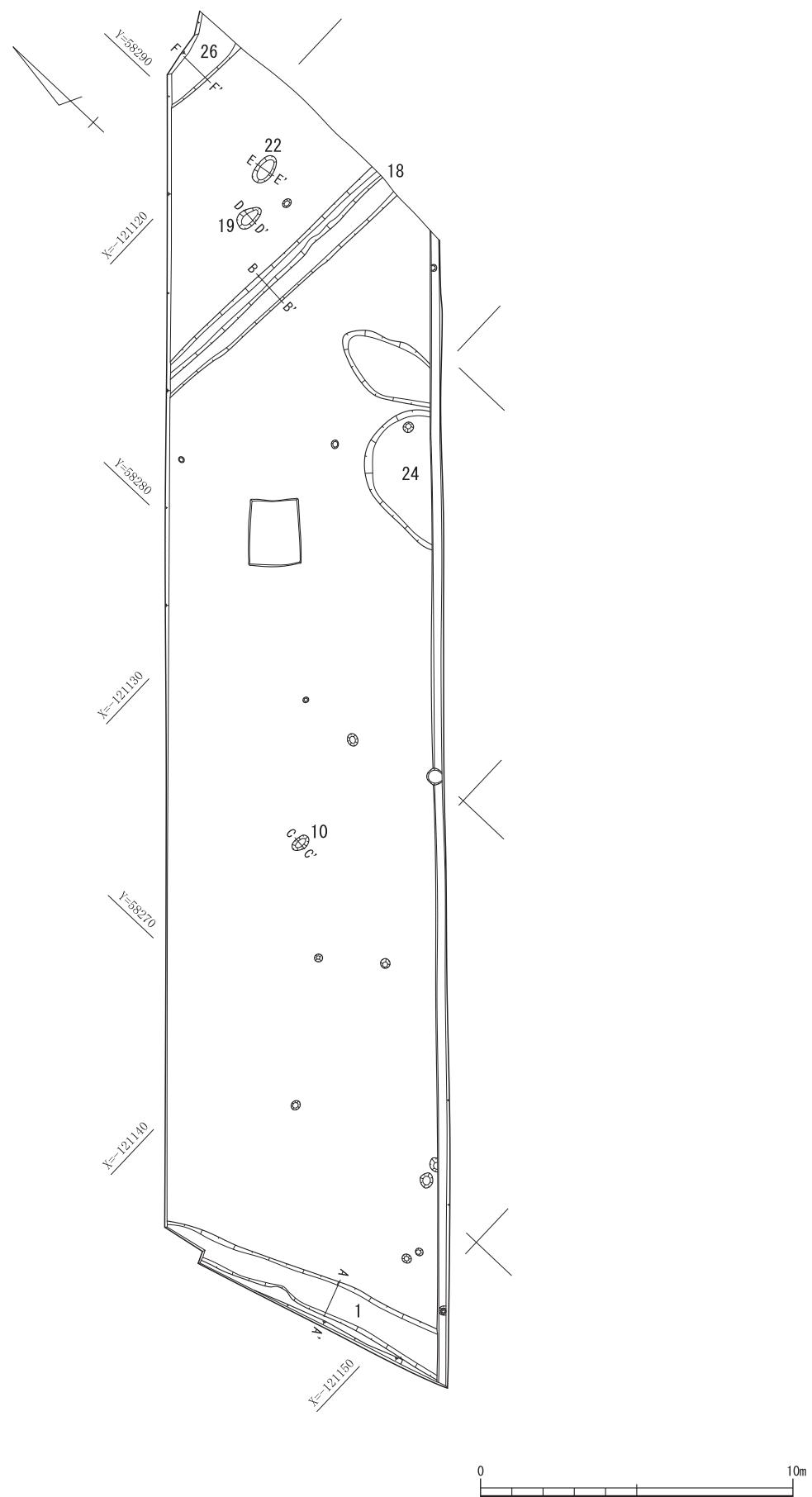
図 版



図版2

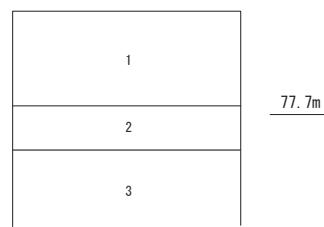


本発掘調査位置

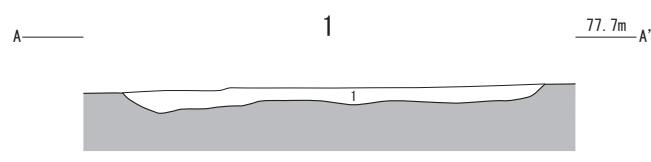


1区全体図

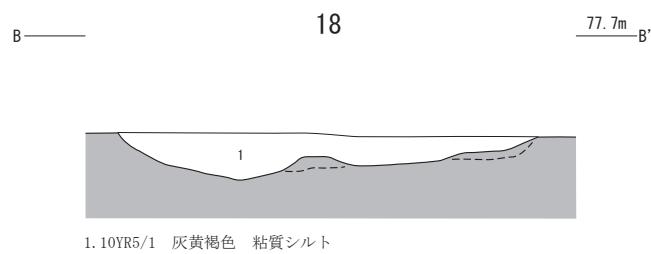
標準断面図



1. 耕土
2. 灰黄褐色 粘質シルト (包含層)
3. 明黄褐色～黄橙色 粘質シルト～粘土 (ベース)

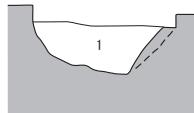


1. 10YR5/2 灰黄褐色 粘質シルト



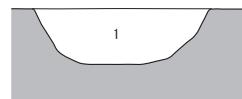
1. 10YR5/1 灰黄褐色 粘質シルト

10 77.7m C'



1. 10YR5/2 灰黄褐色 粘質シルト

19 77.7m D'

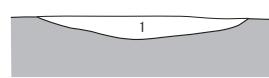


1. 10YR5/2 灰黄褐色 粘質シルト

E

22

77.7m E'

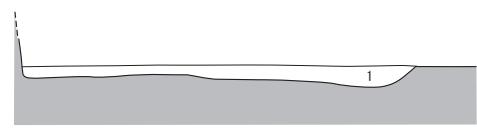


1. 10YR6/2 灰黄褐色 粘質シルト

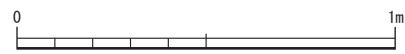
F

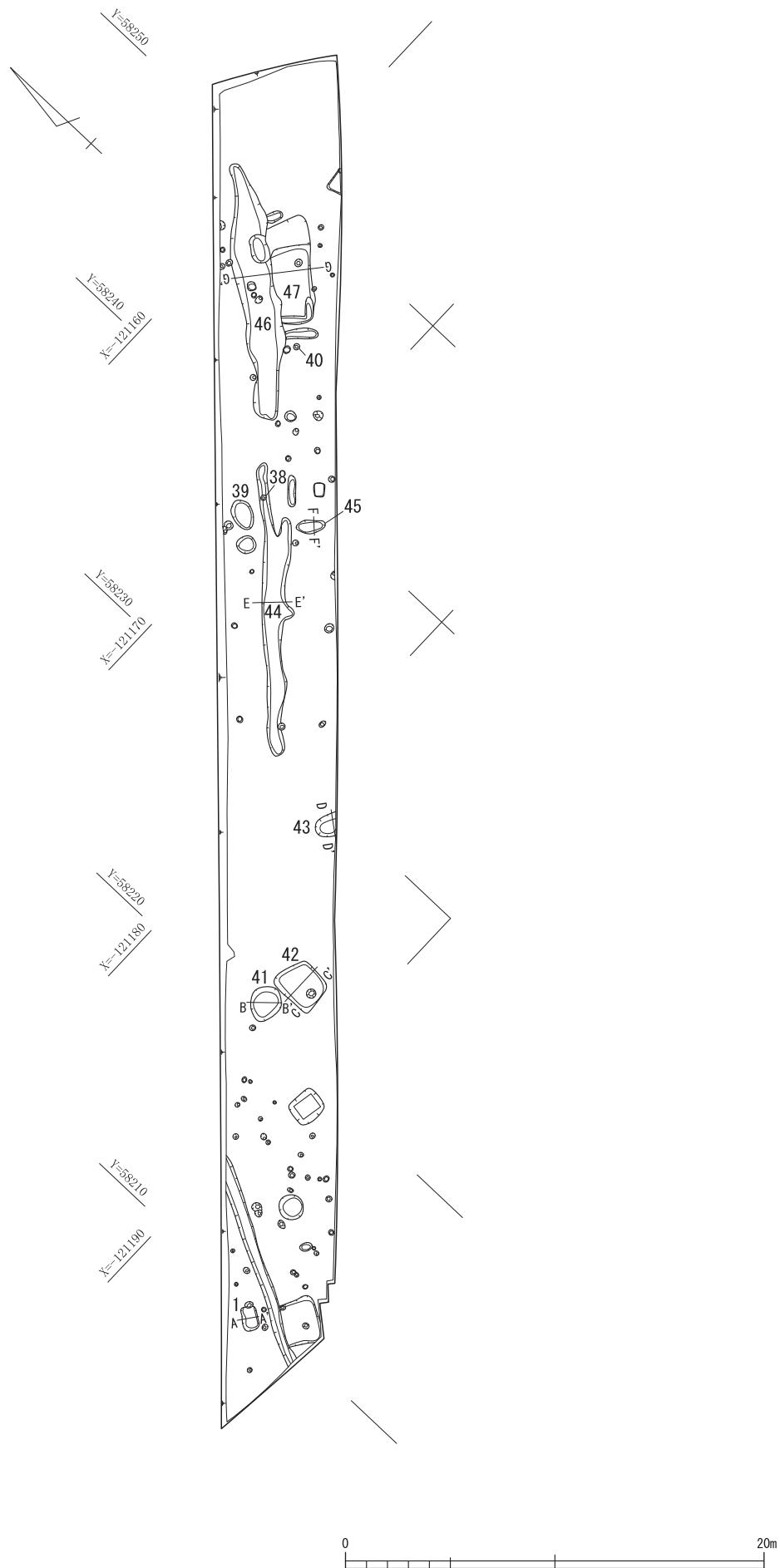
26

77.7m F'



1. 10YR5/2～6/2 灰黄褐色 粘質シルト

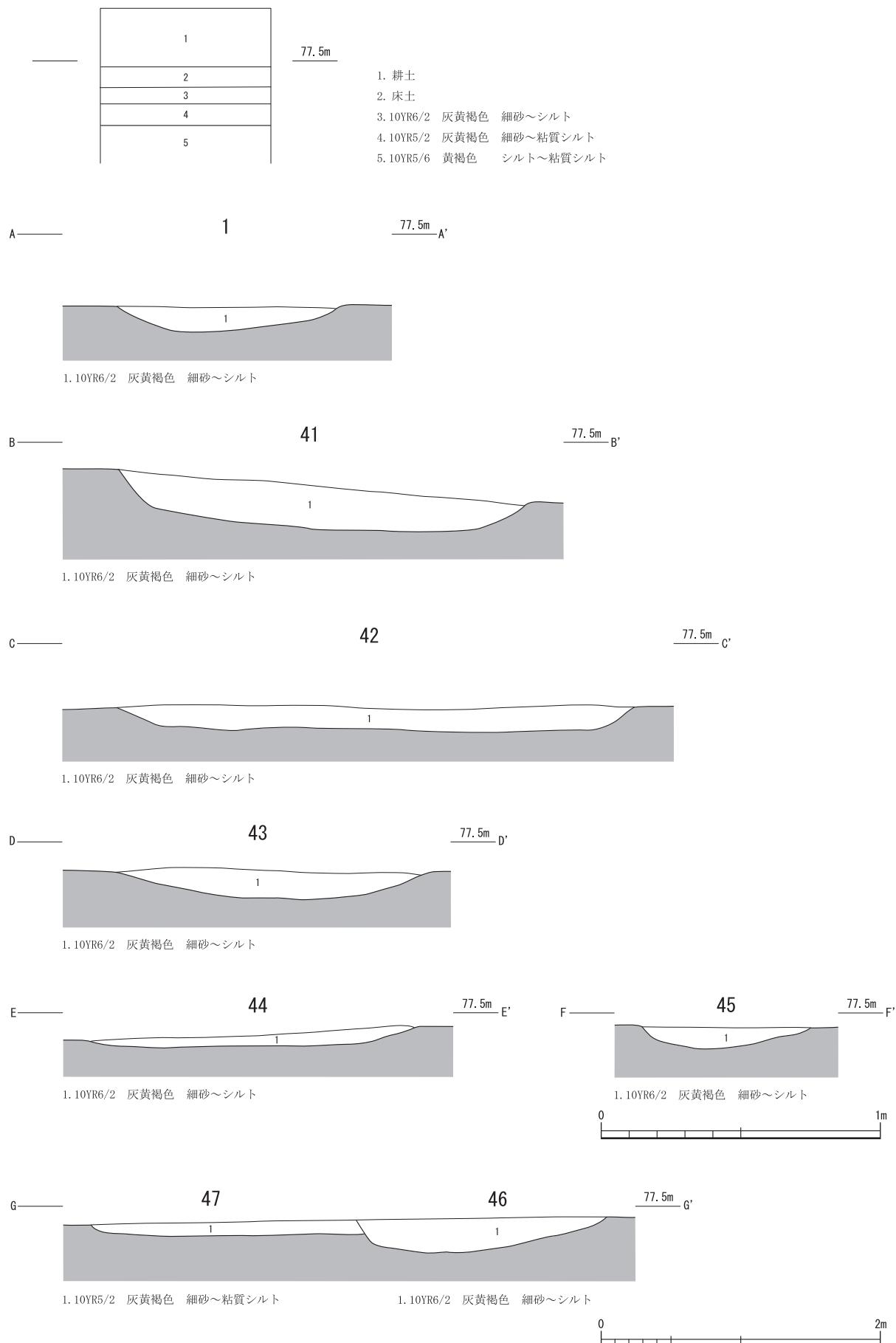




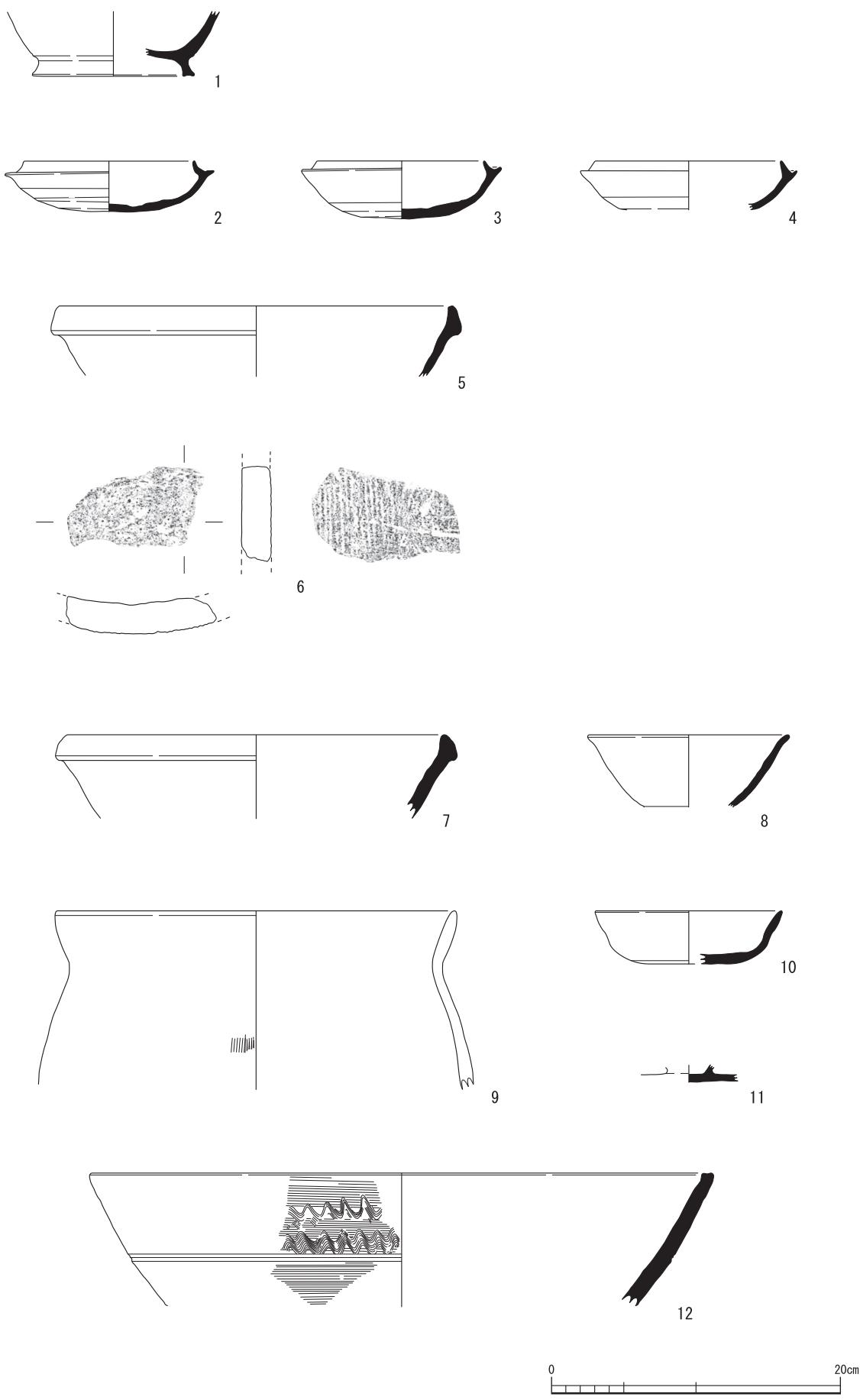
2区全体図

図版 6

標準断面図

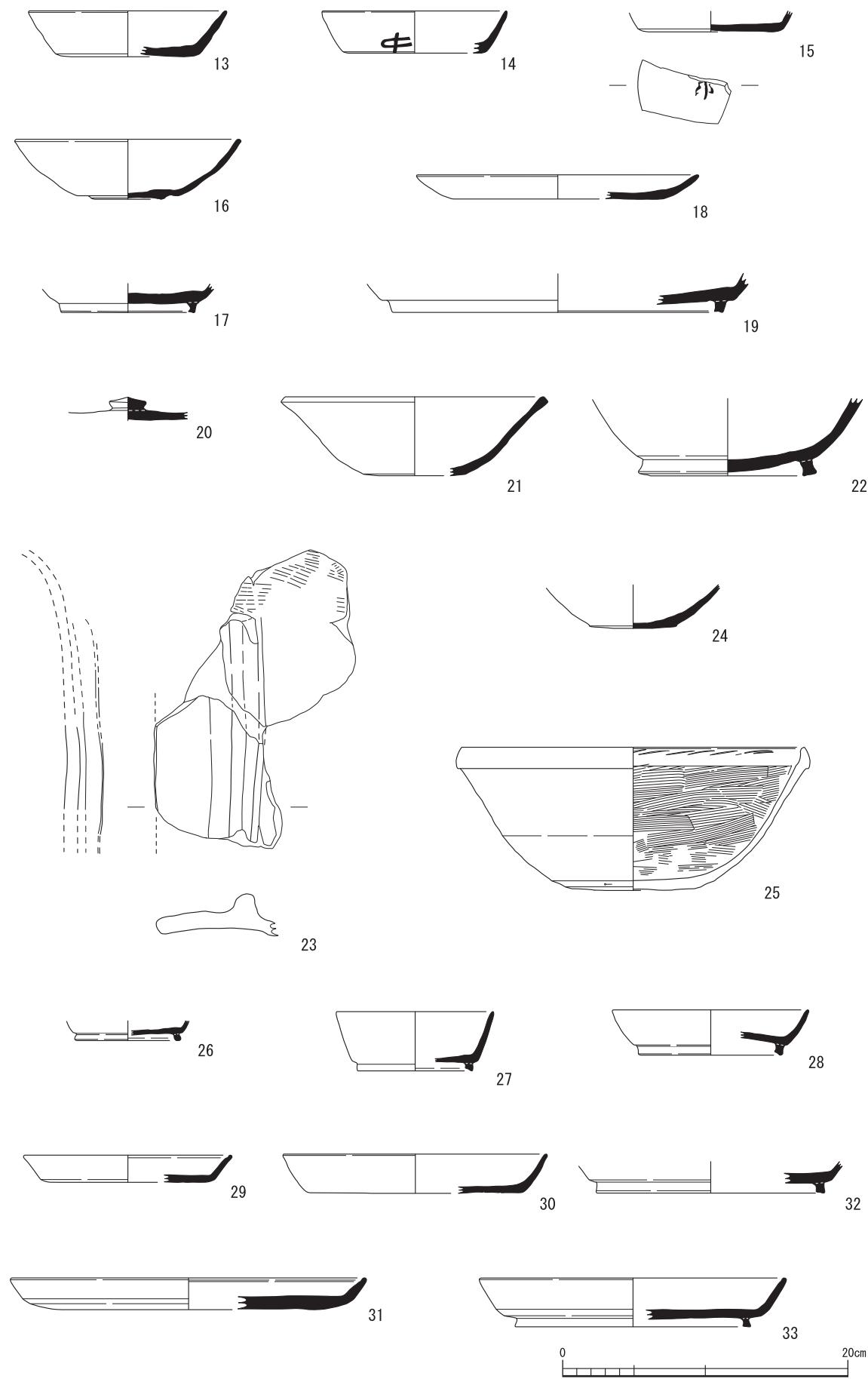


2区標準断面図・遺構断面図

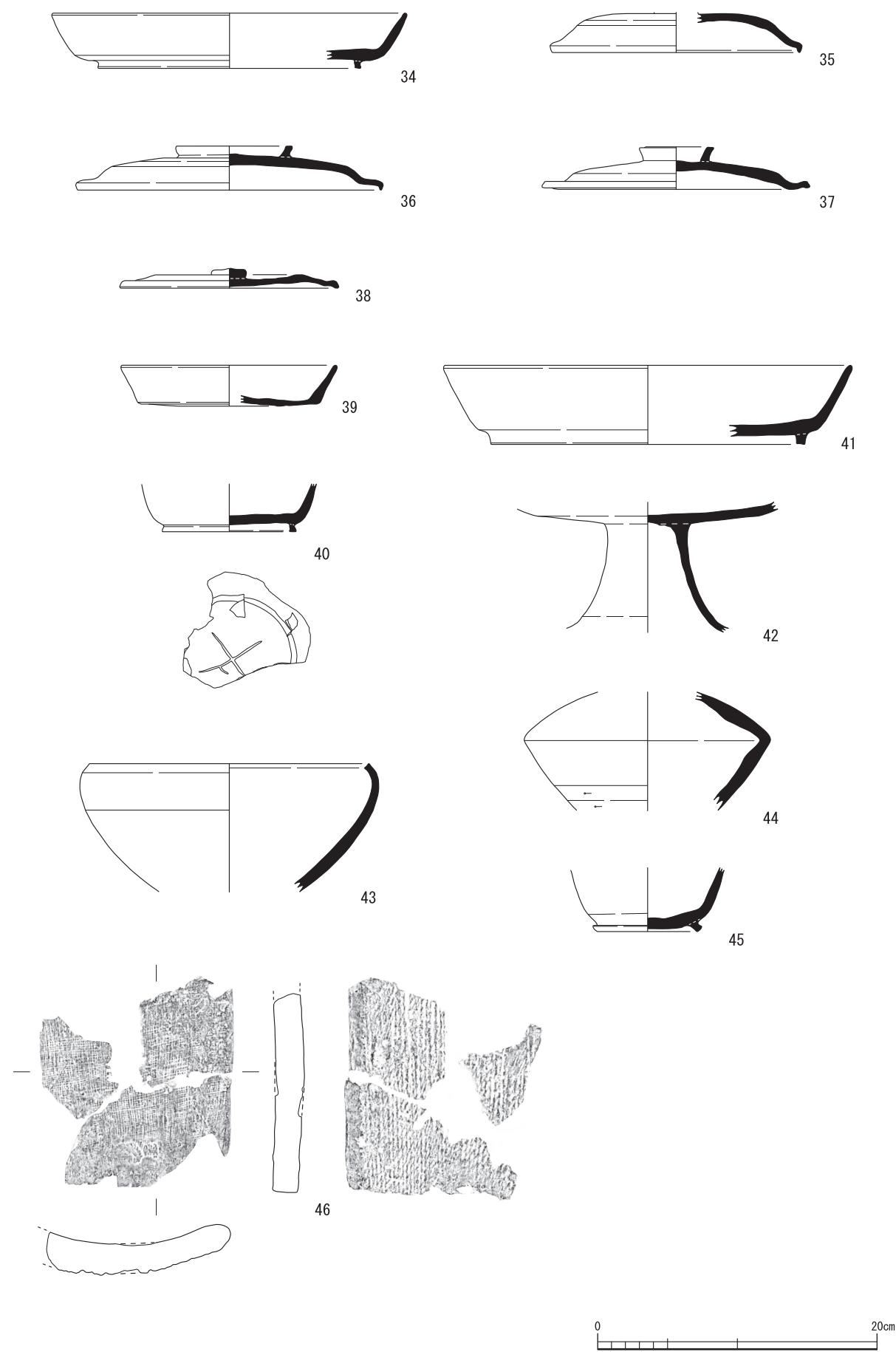


遺物 1

図版 8

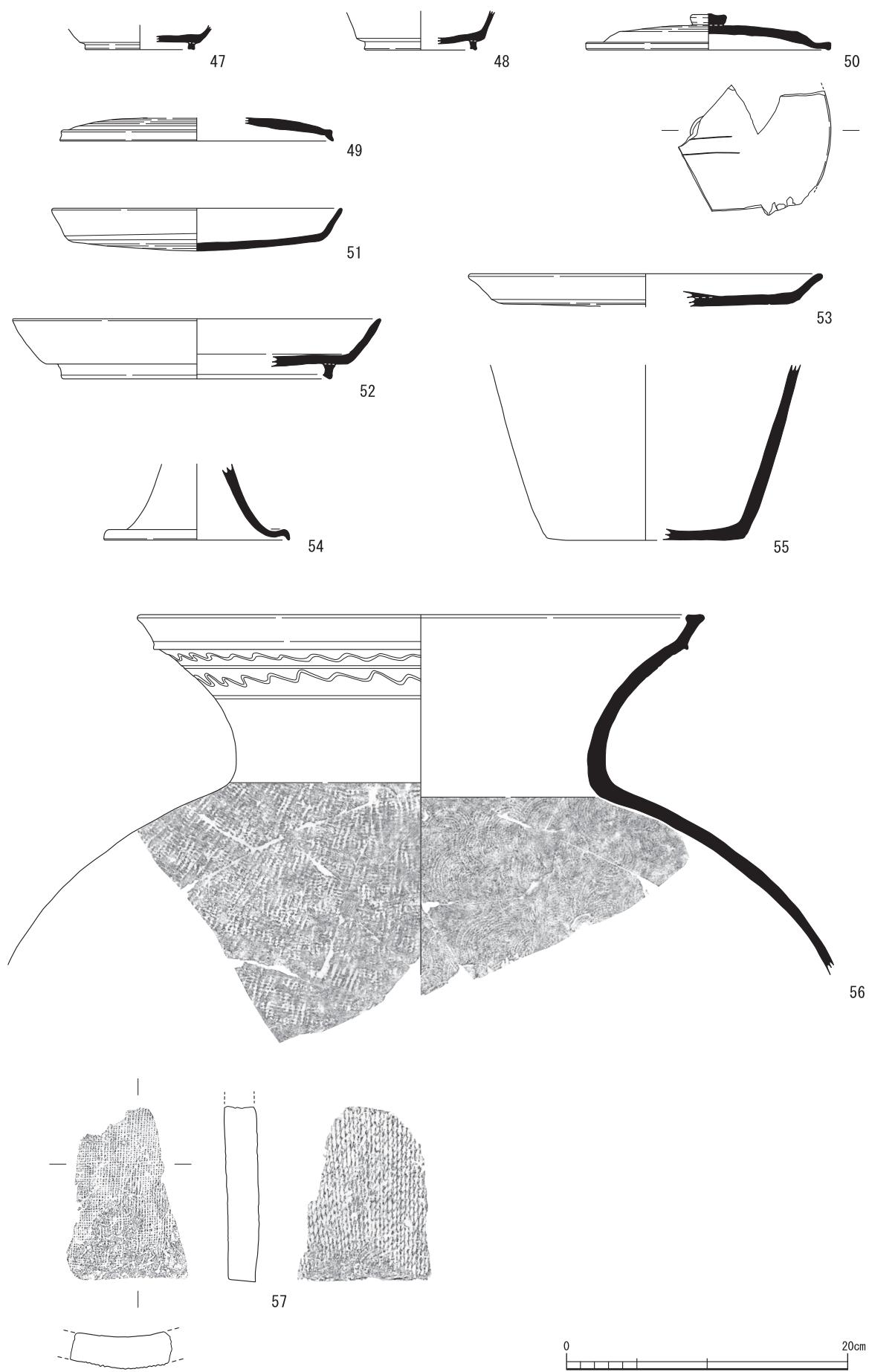


遺物 2



遺物 3

図版 10



遺物 4

写 真 図 版



1区 調査区全景（南から）



1区 調査区北半（南から）

写真図版 2



1区 1 (西から)



1区 18 (南西から)



1区 10 (南西から)



1区 19 (南西から)



1区 22 (南西から)



1区 26 (南から)



2区 調査区全景（北から）



2区 44（南から）



2区 45（西から）



2区 1（南から）



2区 41（南から）

写真図版 4



2区 42 (南東から)



2区 43 (西から)



2区 46・47 (北から)



調査風景 (機械掘削)



調査風景 (遺構検出)



調査風景 (遺構掘削)



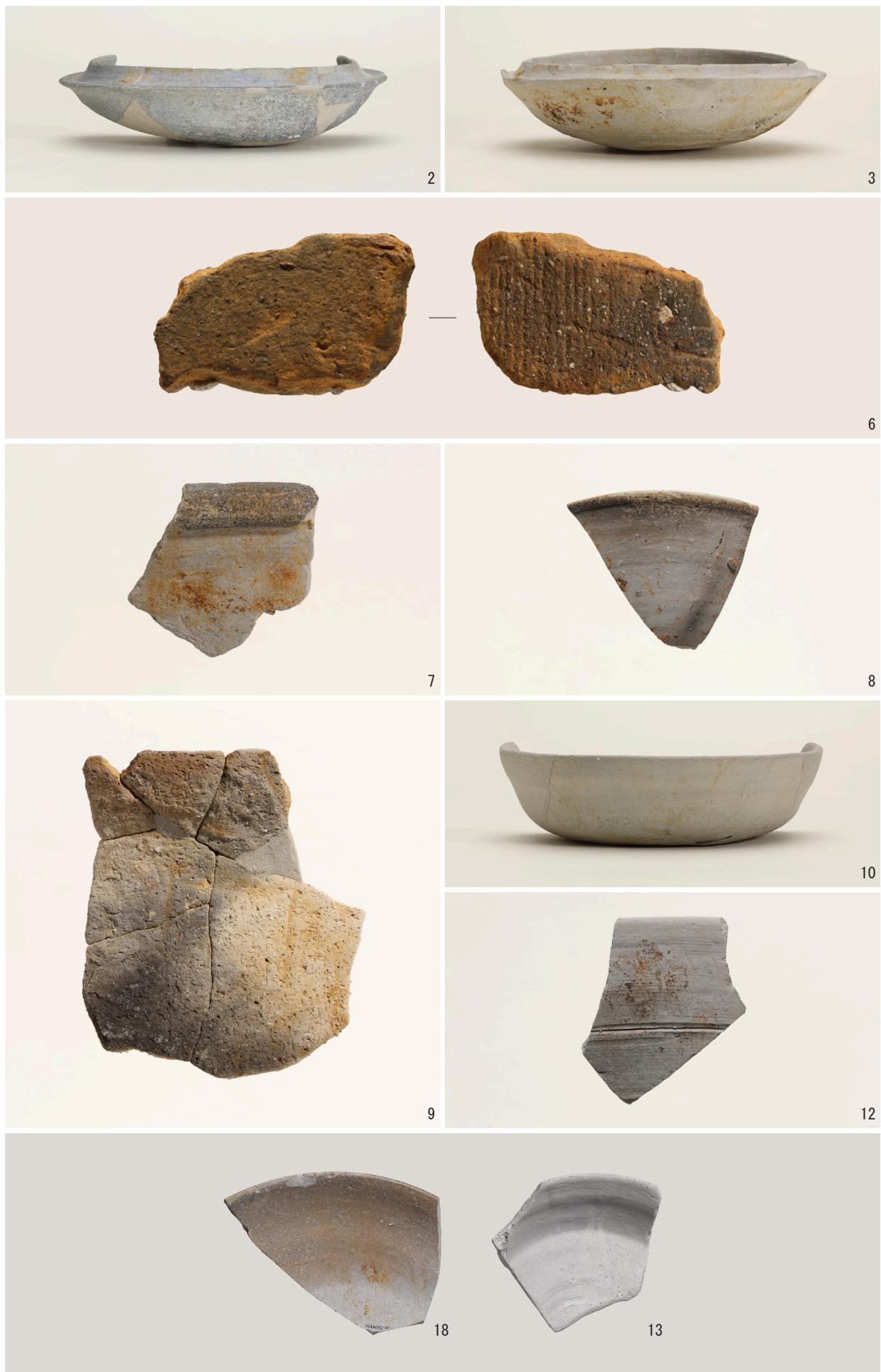
調査風景 (電子平板)



調査風景 (断面実測)



調査風景 (全景撮影用高所作業車)



写真図版 6



14



15



16



21



22



24



23



25



27



28



29



30



31



33



36



37

写真図版 8



39



40



41



42



43



44



45



48



46



50



51

53



52

54



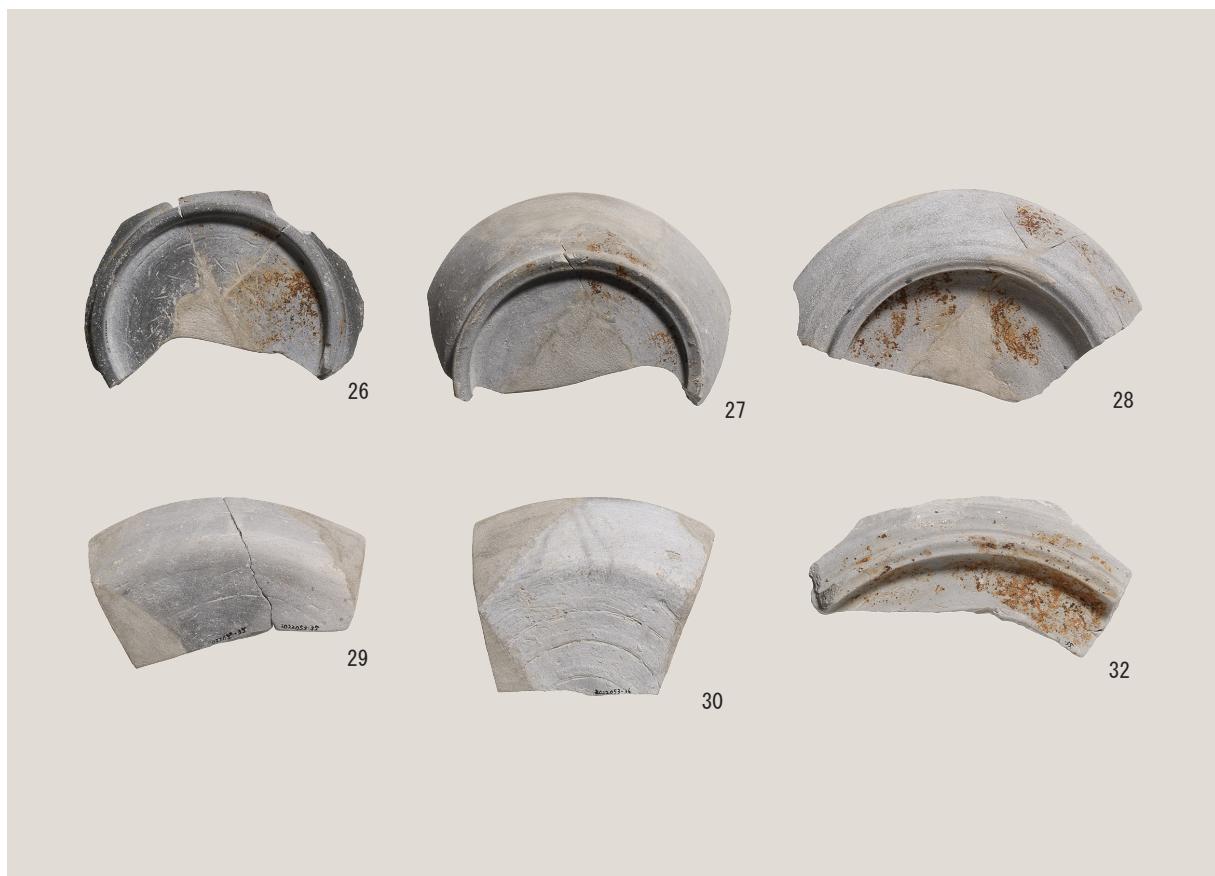
55



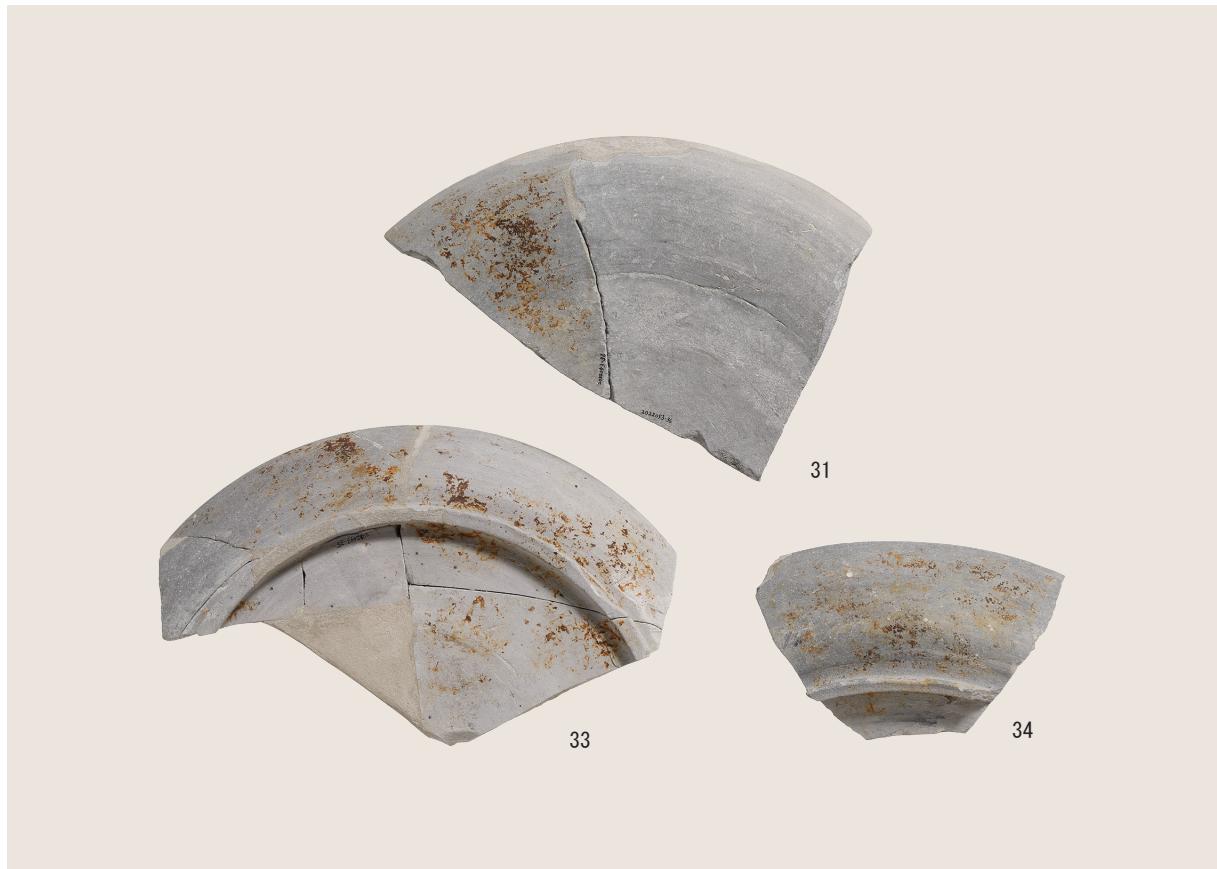
56



57



写真図版 12



兵庫県文化財調査報告 第540冊

加東市

山国・大丹波遺跡

— (主) 神戸加東線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和7（2025）年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社プロシード

〒671-8567 兵庫県姫路市四郷町山脇106-1
